

(2) 漁業環境の再生

高度経済成長期以降、琵琶湖総合開発やその他の経済活動によって、湖岸の風景は大きく変わりました。護岸化が進み、固有種をはじめ多くの在来魚が産卵繁殖の場とするヨシ帯などが姿を消しました。湖岸のみならず、湖底においても水質の悪化や湖中砂利の採取による土砂の減少を原因として、水草の異常繁茂や湖底の泥化などが進行しました。こうした琵琶湖の環境変化は在来種の産卵繁殖活動にダメージを与え、在来種減少の大きな一因となっています。

漁場と産卵繁殖場の整備・保全による自然生産力の向上

〈水産基盤整備事業〉 事業費:46,000 千円(うち国庫補助金:23,000 千円)

◎ヨシ帯と砂地の造成

～事業の背景～

湖岸のヨシ帯のうち、平常時に水に浸かっている「水ヨシ帯」は、ニゴロブナ等の様々な魚類の産卵繁殖、仔稚魚の成育の場として大変重要です。中でも奥行きが30m以上ある「水ヨシ帯」は稚魚の餌になる動物プランクトンが多く発生し、オオクチバスやブルーギルが嫌う低酸素状態となるので、低酸素耐性のあるニゴロブナ稚魚等にとって更に良い成育場であることが判っています。ところが、昭和28年には約260haあった「水ヨシ帯」は、昭和40年代からの開発による湖岸の人工護岸化や内湖の干拓などの影響で、平成15年には約68ha(造成ヨシ帯を除く)と200ha近く減少してしまいました。



自然湖岸(天然ヨシ群落)



人工的な湖岸形状

一方、セタシジミやヨシ帯で生まれたホンモロコ仔魚等は湖底(沿岸域)の砂地を生息・成長の場としていますが、セタシジミの主な漁場であった南湖では、平成22年まで行われていた建設材料としての砂利採取、河川からの砂の供給量の減少、水草の大量繁茂による湖底の泥化などにより、砂地の面積は昭和44年の719haから平成元年には151haにまで激減し、それに伴いセタシジミの漁獲もほとんど無くなっているのが現状です。

～事業の内容～

(1) 水ヨシ帯の調査

これまで、計画的に水ヨシ帯の造成を進め、その面積は令和3年11月までに35.6haに達しました。

一方、これまでに造成した水ヨシ帯の一部には、ヤナギや外来水生植物の侵入等により本来の役割を果たしにくくなっている箇所も見られるようになりました。

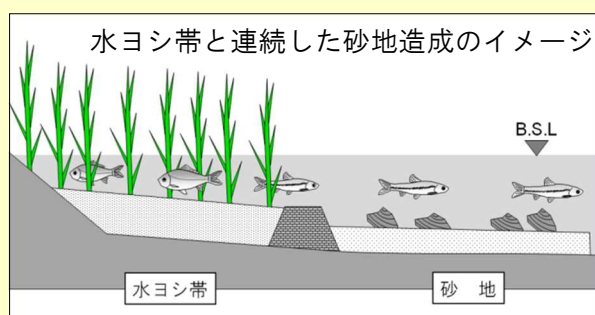
そこで、これら課題のあるヨシ帯の現況を調査し、機能を回復させる手法を検討することとしています。



(2) 砂地の造成および調査

湖底が泥化している南湖で、令和5年3月までに78.1haの「砂地」を造成しました。

一方、これまでに砂地造成した区域のシジミ稚貝密度は未造成の区域より高く一定の効果を認めるものの、年変動や場所ムラがあり、漁獲サイズのシジミ密度が十分に回復していない現状があります。



そこで、今年度は新たな工事を中断し、シジミの増産効果を向上・安定させる条件を調査する（環境調査を行う）こととしています。

～事業の実績と成果～

指 標	水ヨシ帯造成面積							
目標値	令和5年度末 41.0ha							
	H28	H29	H30	R01	R02	R03	R04	
実績値 (ha)	30.4	32.1	33.4	33.4	34.3	35.6	35.6	
進捗率 (%)	74	78	82	82	84	87	87	

(1) 水ヨシ帯の効果確認

今年度は造成後一定期間経過した水ヨシ帯1か所（長命寺左岸第一工区）について、効果の確認を行います。

指 標	砂地造成面積							
目標値	令和6年度末 92.3ha							
	H28	H29	H30	R01	R02	R03	R04	
実績値 (ha)	58.3	58.3	63.3	65.3	69.8	73.6	78.1	
進捗率 (%)	63	63	69	71	76	80	85	

(2) 砂地の造成および調査

今年度は、昨年度から繰り越ししている草津市北山田町での造成工事を完成させるとともに環境調査を行います。その調査結果を今後の砂地造成計画および造成箇所の維持管理に活用していきます。

(3) その他の事業

このほか、今年度は造成後一定期間経過した浮産卵床で環境調査を行い、機能回復手法を検討します。